歌集

庭燎（にはび）

植松壽樹著

東京
紅玉堂書店版

歌集

庭燎

植松壽樹著

紅玉堂書店

歌集

庭燎

植松壽樹著

庭燎

植松壽樹著

〔國民文學叢書第二編〕

表紙　人見少華氏

口繪　大和法起寺　松岡映丘氏

庭燎目次

大正九年

彦根城址にて……一
南瓜の花……四
洛北……五
室津……二
硯……三
宇治……五

村に住みて……二八
折々の歌……三五

大正八年

蹉跎村雜詠……四一
小豆島……五一
淡路……五四
六甲山上……五九
貴船……六二
梅雨の頃……六五
病床雜詠……六九

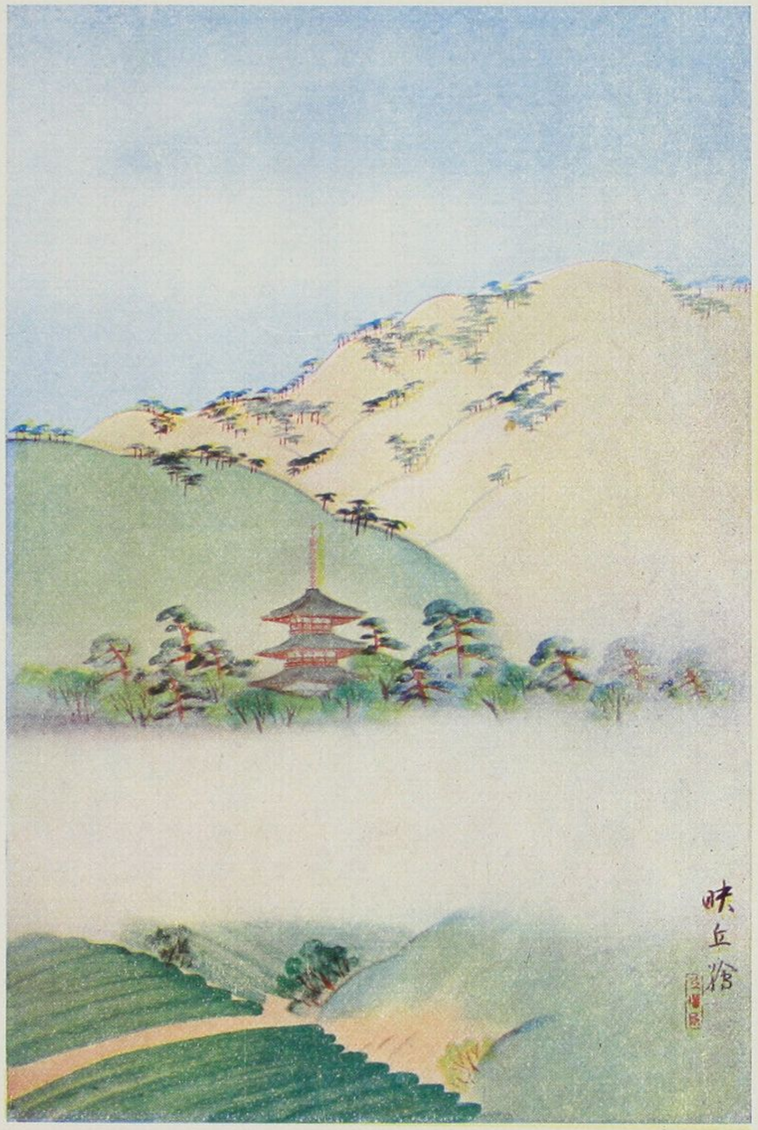
大正七年

病後……七五
兄と遊ぶ……七八
父の日……八〇
住吉……八三
徵恙……八五
櫻井文珠院……八八
海邊一夜……八九
粉雪……九三
日曜日……九四

新年……一二二
大正五年
雜詠……一二七
九品佛……一三三
挽歌……一三八
西遊雜詠……一四五
枇杷の花……一五九
大正四年
雜詠……一六二
庭前……一七〇

土曜日……九五
布引山……九九
大正六年
枝堀……一〇一
枇杷の花……一〇七
蘆……一一〇
大正橋附近……一一二
袷……一一三
奈良西郊……一一四
大阪へ……一一七

今熊山……一七一
猿……一七三
父……一七五
蝶……一七八
秦山木……一八〇
大弓……一八二
雑詠……一八四
芍薬……一八六
桐の花……一八七
竹獨樂……一八九



今藤山……一
猛父……三
蝶……五
蠢……七
大……九
雜……一一
芍……一三
桐……一五
竹……一七
獨の樂……一九

大正九年

八十三首

彦根城址にて

裾べよりややに夕せまる伊吹山ひさしく見る
に雲嶺を去らず

いただきゆ山腹かけてすさまじく土の崩えた
る伊吹山かも

土くえの片面あかきに裾べよりくらみそめゆ
く伊吹山かも

低山の重り曇る西のそら日は殘るらむ雲のあ
かりあり

うしろべの山に重りて竹生島さだかには見え
ず暮れそむる湖

眼の下に翼ゆたかに張るゆゑに鳶のかけりは
おほどかに見ゆ

裏湖の夕しづけみ打ちむれて漕ぎかへる舟こ
この江に滿つ

そここの木むらが中に暮れそめて町の家家
まだ燈ともさず

南瓜の花

ひとり生えの南瓜の蔓みちに伸び大き花ひら
く秋かたまけて

秋まけて南瓜の蔓伸びやまずよく見れば青き
なり花のつぼみ

洛北

詩仙堂

箒目のしるき庭砂はだしにて人の踏みたる大
きあとあり

疊より陽炎たてり午ちかき秋の日ざしは家内にふかく

縁先にころぶし居ればわがからだ日向くさくもなりにけるかな

八瀬に近道するとて小徑に迷ふ

○ひえびえし日陰窪地の柿おらば深くもぞ溜る今も落ちつつ

なまなまと重き柿の葉この峽を遠くはとばず落ちたまりをり

散りたまる落葉の下のこもり水ふめばしみ出でてわが靴ぬらす

草やぶの零餘子の玉はもろきかも觸るるすな
はちこぼれ落ちにけり

大原に入りて

さ筵にしき乾す大豆ひあがりて莢のそり反る
けはひもぞする

大原に腹へり着きて晝飯の鯛をわが食ふひた
いそぎつつ

寂光院

堂のなか暗くつめたし暫くを尼は石うつ燈を
ともすとて

山水のたたへを淺み動きゐる緋鯉のあかさ眼をかれがたし

歸途

夕日あたる秋山すその木群より煙まつすぐにのぼりつつをり

室津

上杉、春田、高橋の諸友と倶に播州室津に遊ぶ。七月十七日龍野に汽車を捨てて、夜既に深し、田舍道二里、峠を一つ越して漸く室津なり

提燈のあかりが圓くわが上の繁みにうつり山の夜はふかし

山の上に更け澄める星見るがうちに色かはり
をりこの靜けさを　變光星

眼下には夜目に廣けし水明りこもり江ふかく
たたへたるらし

山にふかく海が入りこみ足もとの遠きところ
の浪の音きこゆ

提燈をかざして見れど眼はとどかず崖の眞下
に寄る浪の音

山の鼻を廻れば人の聲きこゆ船の燈が見ゆす
ぐそこの海に

魚問屋佐藤氏方に一泊す

廣土間に入りて吹き消す提燈の蠟のにほひを
ときの間嗅ぎつ

○よもすがら海のかたより通ふおと遠磯浪かそ
の幽けきは

早出の船のさわぎを耳近くうつらうつらに知
りつつ寢ね居り

その朝

昨夜くらく通りし道のすぐ下は朝の潮ふかし
岩間岩間に

○深海ゆ手繰りてあぐる章魚壺の限りあらずし
て見るに寂しき

加茂神社境内眺望。驟雨屢至る

○深海のたたへは濃けれぽつつりと一つ小舟に
章魚を釣る人

高き屋のここの眼下の深海の底のかくり岩す
きとほり見ゆ

沖べには八十の家島小豆島四國のやまも雲の
間にみゆ

○満つとひくと迫門こす潮のはやければ君島が
根は赤く崩えたり

松にまじり若竹生ふる辛荷島あまり眼近み忘
れて見てゐつ

日照りあめ海よりしぶき高き屋のここの疊は
ぬれて涼しも

夕立は遂にかも來し殿濱に避けたる船も苫ふ
けり見ゆ

古島の豐辛荷島ゆふだちに濡れてさやけくか
げも亂れず

海にさす高き松より雨雫おちてゆく見ゆ一つ
ぶ一つぶ

夕立の過ぎたる松の繁みより雫おちやまず深
うみの上に

再び佐藤氏方に歸りて晝飯を振舞はる

奥まりし家のいづこか鈍きおと時計の動く音
のして居り

魚市の籠の中に跳ねまはり居し蝦を朝見て晝
は食しにけり

七曲の海岸

岩の間は磯草とぼし莖長に黄花萱草さきてあ
らはなり

印南野ゆ長くのび出でし洲のはては海にまぎ
れて見のさだかならず

海にむかふ禿山裾に煙突たちすべもあらぬか
も煙はなくて

硯

朝鮮なる兄上より贈られたる

朝鮮の海州といへば生きてわが踏む日なからむ其處ゆ來し硯

○海州はいづこなれかも其處ゆ來て硯いまあり
わが手の上に

かがなべて待ちにし硯いまはありこれの現の
わが手の上に

机の上とりかたづけて一つ置く大き硯しゆた
けかりけり

見ればただ空の色なし輕げなり持てばおもたき海州の硯

新しき硯の面のあやしかも水は彈かれ玉とぞかたまる

持ち古りし小き硯と入れかへて海州のすずり硯箱にあまる

宇治

二月八日、上杉、高橋兩君と倶に宇治に遊ぶ。黄檗山にて

○雪のおと松に幽けしこの大き寺のいづこに人は住めるや

人居らぬ伽藍の歩廊ゆきしかば雪の音せりそ
の裏山に

鵯はあまたは啼けど裏山にこもりて飛ばず雪
の降れれば

堂の屋根白くなるまで一しきり霰降りしきや
がて止みたり

三室戸より天が瀬に越ゆ

茶ばたけの畝間畝間にいちじるく消殘るほど
は降りし霰か

ふりさけて見上ぐるわれに壓しかかり崩れむ
とするあまた大岩

村に住みて

中尾義信君の家にて

仰ぎつつ筆のはこびを眼にたどる長押の上の
柳里恭の額

青木賊ふかく繁れる中にしてすわり豊けき大
石ひとつ

明方に眼覺めて

音聞けばしみみに降れる雨ながら障子は朝の
あかりして來ぬ

冬畑

間引きたる株間ひろけれ寒寒と唐菜の白き莖
たちにけり

葱畑に藁屑かけて防げども葱はしほれて霜お
きにけり

年を經てよき茶芽ぶかぬ古株は剪りて束ねて
軒の下に積む

身邊雜事

明磬の溫泉のぬくみ身にもちて丘を下り來も
枚方の丘を

破るるまで足袋はもいたく古りたれど田舎に
すめば心づかひなし

○したしみて言は交さねおほかたのこの村人に
見知られにけり

○百姓の座敷借りすみ肩冷ゆる暁のさむさに早
く眼さめつ

○肩ひえて眼はさめにけりひつそりと暁の電燈
まだともり居る

うつし身の寒さに堪へて眼さめゐるこの暁に
水は凍らむ

○ひとり身は俵の底に濕けこほる炭をつかみて
指を痛めぬ

戸の外の厠にかよふ縁のひえ足に冷えとほる
夜寒を起きて

電車ゆけば響きて音をたつるなり寂しきもの
か湯沸の蓋

田の畔に藁を焼きたる灰なれば火鉢にとりて
まじる籾がら

折々の歌

寝ねし間に風吹きたるらむ粉の如き南天の花
手水鉢にたまる

風なぎし午後のくもりの重重しくれなゐ濁る
夾竹桃の花

枚方の丘につつきて蔭ふかし松に竹まじる蹉
跎村のをか

母が手にむかしせし如く今日ひとり汗疣を洗
ふ桃の葉を揉みて

山科御坊

山科の深井のまみづ汲まむとしを暗き底に釣
瓶をおろす

三島江

刈あとに生ひつぎていまだ秀長けずもまたも
かるらむ河の洲やなぎ

大正八年

六十五首

蹉跎村雑詠

九月下旬北河内の蹉跎村に座敷を借りて引き移る

鑿井

今日しも湧きたるならむ夜おそく歸り來れば
水の音せり

水湧くと噂ひろがりたるならむ提燈つけて見
に來る人あり

地の底二百尺なる水をひきて青竹筒ゆ噴き出
でしむる

三十日掘りて辛く噴きいでしこの水にこの井
の水に土のにほひあり

路傍に蝗を乾せる

むしろ敷きて蝗ほしたり日向には蝗のにほひ
湧き澱むかも

死際に力のかぎり伸したる蝗の脚のとげとげ
しもよ

釜に入れて茹でなどやせし赤黒く變れるいな
ご秋の日に乾す

風なき秋日の照りに赤黒きいなご專らかわき
つつあり

雜草の花

井戸の邊のおどろの野菊さかり過ぎてつめた
き下駄を今朝ははきけり

顔洗ふ井戸べに眼鏡とりしかば唯しどろなり
みぞそばの花

田の畔の溝をまたぎて濡れにけりかくは含め
るみぞそばの露に

枝しげき花とおもひし摘めばただまばらに咲
けりみぞそばの花

齒磨粉のうすくれなゐは零れつつしるくしも
あらず犬蓼の花に

枚方の丘にのぼりて

崖のつち日にかわくなべほろほろと人目なき
まも崩れつつ居るや

秋の日のあかるく射せる二階家の床の掛物し
ろくし見ゆも

障子あけて日のうららかに射しいれる二階の
ざしきに人すわりをり

日あたりのよき家建てて住む人は障子をあけ
てうららかに住む

稲田の上を吹きとほる風の筋うち光りつつき
はやかに見ゆ

六甲ゆつづく山脈北にのび遠低まりて盡くる
邊やいづこ

枚方

古町の枚方ゆけば軒ひくみ暗き屋内に時計鳴
り居し

微恙の後に

ゆあみして手拭しぼる手首には聊かたゆき疲れありけり

齒みがきの粉のこぼれのいちじるき疊を掃かず四日寢にけり

小豆島

草壁村

家のうち覗きてみれば人居らず屋根の豆がら
ひたかわきゐる

この島に雨のふらざる幾夜さか道草の葉の埃を見れば

寒霞溪

神懸のいただきに來て更にあふぐ圓草山の星が城かも

海にたつ畫靄ぬちの遠きやま備前とも云へり播磨ともいへり

岩山のあひだに狹く限られし瀨戸内海のうしほの澱み

なづみ來し荒山中に手づくねの陶物やきて人の住めりけり

淡路

八月某の日。夜十一時大阪築港を解纜して、志筑の沖に日の出を見る

あかあかと濃霧の中に燻りつつまろき朝日あり眩しくもあらず

○磯によせて浪碎けたり暫くして浪の音きこゆ
この船の上に

○淡路は見のさびしもよかはたれの磯にくだけて浪白くあがる

磯のみちを提燈さげて行く人は燈ともして行く既に明けしに

提燈をさげてまだきに行く人は既に遠からむ
家をはなれて

船の上ゆ見つつしゆけばこの島に平地なし山
に田つくる

島びとが愛みてつくる淡路米とぼし米はも味
よしちふ

洲本

凪ぎしづむ洲本港に船をすてて遂に踏みたり
この島の土を

先山にのぼる

淡路をここと思ふに遙遙し稻田あをくして道
遠くつづく

淡路に高山なしと然れどもここゆ見れば更に
たかき山あり

六甲山上

九月廿四日。窪田先生及松村英一君と俱に六甲山に登る。石屋川に登り口をもとめて有馬に下れり。同行、上杉、高橋、村上、假屋の諸君

この原に秋くさ多しむらさきの桔梗なからめ
やつばらかに見む

めづらしみ摘みつつ來しを龍膽のはな頂にく
れば其處にもここにも

龍膽は蕾ふくらみほとほとにこもる紫あらは
れむとす

肩のへに芒みだるる眞晝山もの言はむとし言
はでやみにき

片靡くすすき眩ゆき山腹みち消えむとしつつ
人の帽みゆ

みちなき小篠のなかに踏みたるは茸なるらし
やはらかにして

貴船

六月一日上杉、高橋兩君と倶に鞍馬より貴船に遊ぶ、折から貴船神社の祭禮にて御輿の渡御に逢ひしは思ひ設けぬことなりし

山峽に風吹きいでたり光りあひ木の葉みな動くさうさうと鳴りて

今日しも祭ありちふ峽の村みち細くして人にゆきあはず

山峽は青葉くらきに金色の御輿ちひさく通りすぎたり

みこし擔く若者のこゑ峽ごもり聞ゆるごとに遠ざかり居り

柿の木の若葉はいろの寂しきにちかづき見れば花を持ちたり

照りひかる若葉の中にまさびしく咲き散るものか柿の木のはな

梅雨の頃

夕まけてひた暗くふる雨ゆゑに仕事終らむ心せきたり

珈琲店にて

湯氣たちて紅茶にほへり今のまの心やすさは
誰に告げまし

貧しけど足れりと思ふ腹みちて千日前をわが
あゆむなる

阿倍野に下宿して。附近に火葬場あり

電車おりて家並くらし中天にこよひは月の暈
かむりたる

おしなべて勤人住むこのあたり早くとざして
寢る家多し

人を燒くにほひしるしも暖き月夜の風の咽喉
にむせばゆ

梅雨晴

花すぎてひとの忘れし石榴の樹ざくろ大きく
なりてをりけり

梅雨はれて風立つたかき梢よりくづれて落つ
る泰山木のはな

病床雑詠

かりそめの病とおもへど臥れれば枕邊しるく
埃たまるも

仰に居ればおのづから見ゆ硝子戸の外に降る
ゆき刻刻に積る

病みこやり寂しきときは枕邊にうごく時計を
みつつ遊ぶも

○病おほきわが身を堪へてこれの世に生くらく
ほどはつつましくあらむ

○病がちに三十路に入りてかなしもよ生くらく
業にはやも倦みにけり

家刀自のいけし萬年青は優しけど塵置く見え
てわが病ひさし

枕邊の時計おとたて居たりけり夜ぶかくさめ
てわが眼ひらけば

大正七年

四十八首

病後

ねもごろにからだ洗ひをり夏の日のここに射
しきて湯屋の明るき

十日あまり病みこやりたり浴して疲るる程は
おとろへ覺ゆ

十日あまり病みて臥りつ櫛の齒に拔けからむ
髪はいたく伸びにけり

わが病よきにかあらむたれこめて一日居りし
に腹へりにけり

いとどしく腹へる覺ゆ物欲しき心こらへて樂
しきろかも

雨ぞらに街の燈あかり廣れり一日こもりて家
をいづれば

四天王寺の石だたみみち夜雨ふり足もと暗く
ゆくに光りつ

兄と遊ぶ

十一月一日。宇治に行きて

朝鮮に住める久しき兄と逢ひて一日仲よくあ
そびぬるかも

齢へだつ兄と弟と幼くて遊びし知らに今日か
くし遊ぶ

手紙の終に書きつけて松村君に

言にしていへば易きを口惜しく書きわづらひ
て止むことの多き

父の日

十月十四日。亡父の七回忌なり。鳳林寺といへるは我家の宗旨にて、しかも由緒古き寺なりと聞き、乃ち獨り行きて回向を頼みつ

ここにして御墓はなけれちちのみの父のみ魂は吾と俱に座す

業に倦みなまけ心をわが父も持ち給ひけむとおもふ戀しさ

たはやすく人に親まぬわが性は父にやうけし寂しかれども

忌引の届出して勤めを休む

忌の日ぞ籠り居らなとつぶやきつ陶花瓶に黄菊さしたり

こもり居ればのどにもあるか日のひかり硝子戸すきて膝のべに射す

住吉

住吉翠香庵にて國民文學社歌會席上

住吉の松の葉しぬぎ降る雨の降り足りて今はみちに溢るる

みち知らぬ住吉に來て秋雨の降りあふれたる
水を渡りつ

風吹けば葉裏ひるがへし川くまに老樹ぞ立て
る何の樹ならむ

微恙

微恙を得て濱寺の海岸に幾日かを過す

やまひがちに三十路に近く身はなりて遊ぶ暇
ある今日のわれかも

いささかの病に萎れ出でくれば浪とたはむれ
千鳥あそべり

人居らぬここの濱邊のつばなの穂見ゆる限り
は風にそよげり

ひるすぎの沖の曇をおぼほしみかへりみ見る
や金剛葛城

松の間に高屋根しるく家居してここに住む人
は温室をもてり

雲水寺歌會席上

人待ちて朝の間さびし荒陵の竹むら見れば竹
はゆれをり

櫻井文珠院

古伽藍さはにしあれど飛鳥路の咲きさかる花
はここにして見つ

靴の中に入りたる石を取り捨てて心は輕しし
ばし憩はな

海邊一夜

同僚十餘名と倶に金熊寺溪の梅を見、道を轉じて淡輪に出でたり。夕刻より丘上の旗亭かどのに小宴を開く。宴果てゝ既に夜深し。醉ひたる同僚を電車に送りて、已れはこゝに宿る

磯山の小松がうれの淡路島はるかなるかも月
夜に見れば

わが立てるあたり明るし曇夜の空と思ふに月のありけり

松風の音のさやけさ今日越えし磯山にして吹くにかあらむ

松風の音のさやけさ聞きつつぞ今宵おそらくいねがたからむ

磯山の風の音には馴れながら冬は寂しとお宇乃はいふも

お宇乃、婢の名

はしけやしお宇乃がのべし床の中に今宵はわれの眠る夜かも

わがどちの醉ひたるどちの醒めはてて働く明日を見ねばならぬか

終夜松風を聞きて眠ならず

いをねずて明方ちかしまがなしく零れし酒の
にほひはするも

四時までも覺めて數へし時計のおと酒の酔は
も今はあらぬを

粉雪

はやち風にはかに吹ける外を見れば粉雪ちる
なり日は照りながら
青青と冴えきはまりて眞冬空いまし俄に粉雪
を散らす

日曜日

日曜のこもり居さびし浴して時經しからだは
いたく冷えたり

日曜を稀にこもりつ晝の間のおのれが部屋を
めづらしみ見る

土曜日

勤終へて街あゆみ居りひさびさに手紙を書か
むこころの湧くも

○歸り來て何をなすとはあらねども暮れ果てぬ
日の明り樂しも

春近し夕かたまけてわが室にも少しさし來る
日射となれり

寺庭の木立深けど椿のみ鳥の來てゐる枝のゆ
れかも

寺庭の一もと冬木眼ぢかきを櫻と見つつ飯食
ふひとり

○隣室に人は居すけり音立てて食へばうましも
これの茶漬を

○夕飯をいそぎ終りて土曜日の時たつ早き夜を
をしめり

雨ふりてほのほのぬくし夕戸出に羽織をぬぎ
てうれしきものを

春近し

布引山

溪の間に光さし入り繁木がうれひかるを見れば小き枇杷の實

布引に松のかげ多し駈上り駈下りあそぶ異國をとめ

大正六年

五十三首

枝堀

下宿を出でゝ源聖寺坂を下れば、汚き堀の入り込めるあり。満潮には水岸の石垣に及べども干潮には底の泥露れて悪臭を放てり。沖田橋、福知橋。道頓堀川より入り來る竹筏は多くこのあたりにとゞまる

難波のうみ潮干にけらし枝堀に散り浮く木の葉いまぞ流るる

ほかほかと蒸氣たつ見ゆ朝はやき引潮時の水の動きかも

枝堀にふかく入り來てひそかなり水漬くひさしき青竹筏

枝堀に入りてとどまる竹筏まなく濡れれや竹はま青き

枝堀にここだ水漬きて竹青し荷舟はゆくもその竹に觸り

堀の水うごくとなけれ水の面にうつれる影は靜けからなく

堀に沿ひて竹小屋多し

竹の上に竹のころがる音ぞすれ小屋の中には
人ゐるらしも

竹小屋にはこぶ青竹その竹の投げ出されたる
音のよろしさ

冷やかに水より揚げし太竹の切口しろく積ま
れたりけり

竹小屋へかつがれて行く青竹の秀のゆれせは
し折折地を打つ

夕景

冬やなぎ町裏堀の夕暮に枝を垂れをり暗き水
の面に

にたり舟海にはゆかず橋際の暗きにこもり今日もまだ居る

夕一とき町裏堀の木の橋に人のゆききの忙しく聞ゆ

夕まけて熱つのり來も眼の上におもき天井かぶさりてゐる

病中一首

枇杷の花

櫨紅葉ちりつくしたる空廣し今はもしるく枇杷の花さけり

冬かけて實をし結ぶと枇杷の樹はさしも寂しく花咲きにけり

枇杷の花いまこそさすが咲き満ちて眼にしるきからいよよ寂しき

崖の上のはやき朝日に枇杷の葉の雫するみゆ霜ふりけらし

枇杷の花さすがにこれも木の花の咲きのかしこきにほひを持てり

風すぎつおのれひそまる一ときの枇杷の老樹はいつかしく見ゆ

○

ひもすがら風に吹かれし枇杷の樹の黒黒として夜に入れりけり

○

寺庭の一樹の枇杷に降りかけて夜半の時雨のおとの幽けさ

櫨

下宿は生玉神社に近き高臺にありて附近寺院多し。吾が室の向うに聳ゆる屋根も寺にして見下すところは墓地なり

寺庭にとなり住みつつ櫨の樹のもみぢきはまり葉おとすを見つ

櫨の實を來あさる鴉おのがじし餓ゑてあされば食みこぼしつつ

墓原の手向の黄菊あさなさな見るべくもわが戸ひらくものか

六甲の山なみ日日にあたらしく晴れまさり見ゆ冬ちかからし

大正橋附近

くもり日の天より落つる風荒みけむり渦巻く
巷のなかに

街路樹の枯葉吹きとばす風のむた近き工場の
硫黄のにほひす

袷

たらちねの母がたまひし袷きもの夜戸出さむ
けみ今日きそめたり

袷着てこころ静かに坐りけり千日前の燈のあ
かり見ゆ

奈良西郊

唐招提寺

金堂に佛繕ふ人こもり何かかそけき音をさせをり

藥師寺

佛工はこもり久しも金堂のそばの芝生に曼珠沙華あかく

毒きのこ長けつつ赤し鐘樓のここの芝生を人のふまねば

曼珠沙華咲きさかる日の照りあつく汗拭きあ
へずこの寺道に

藥師寺の塔の水煙かぎろひつ搖ぐがに見えて
秋空ふかし

秋の日のあかるきを來て堂の中すきみする眼
にくらきみ佛

大阪へ

大阪に職を得て八月十五日夜東京を立つ

○東京を去る夜なれかもわが足の土踏むおぼゆ
東京の土を

雲の間の光するどき一つ星つひに隠れて雨となりにけり

築港なる縁者を頼りて假寓す。家の前の溝渠には夕暮、何處よりともなく船集りて高き檣を並ぶるなり

住みそむる大阪の夜の夜業のおと枕かなしく寝そびれにけり

蚊帳の中の寝ざめ暗しも畳にはこほろぎなら む跳ねて居る音

戸開けば虫のこゑ満つ諸のむし磯葦原に夜すがら啼きけむ

暁の海の嵐にゆすられておのれと軋む帆ばしらのおと

假橋に舟はちかづき暫くは帆ばしら倒す舟人
のころ

○突堤にゆふべ潮騒やみたれば河内の山に雲の
ゐる見ゆ

○夕されば泊り久しみ煙絶つ暹羅軍艦も燈をと
もしたり

雨とならむけはひの雲は動きつつ遠稲光ひん
がしにすも

○道知らぬ工場まちの夜をくらみ藥の匂ひ咽喉
に堪へずも

○鈴虫は舟に飼はれて聲ほそし夜くだちきこゆ
ほそきその聲

新年

○工場のひるの汽笛の今日は鳴らず年の始と思はざらめや

ならび立つ煙突に今日けむりあらず年の始と思はざらめや

○元日の夕さりくれば床の間のをぐらくなりしものかげ寂し

○羽子のおと冴えまさりきこゆ元日の夕まけてなにか寂しかりけり

大正五年

七十六首

雜詠

冬期の試驗迫りて夜を更かすこと多くなりぬ

○物書けば紙に聲あり小夜中の幽けきこゑのかくはさびしき

鉛筆の秀はも鈍りてたどたどし今宵はもはや
寝むとこそ思へ

埃

○飈飈と帥走夜空に鳴る風のせまるとすれば埃
まひあがる

○片側に吹きよせらるる小夜埃眼にこそ立たね
音のさびしさ

五位鷺

○五位のゐる樹は落葉して寒からし夜半のくだ
ちに聲のきこゆる

ひたくらき夜空の下の五位の群かたみに知らず騒げるらしも

五位鷺のむれの騒ぎは間遠けど小夜中にしてきくに堪へずも

雨の日

玄關の夕かげくらし雨の中を歸り來りて靴ぬがむとす

いそがしく靴をぬぎたり手に殘る革のにほひはさびしきものを

われ

ぬばたまの闇の底にし居るわれの息するわれ
のけはひ聞ゆる

くらがりにおのづと覺めて眼を開くわれの命
の怪しくもあるか

いましがた笑ひしわれの居鎮り物書きて居る
怪しくもあるか

九品佛

九品佛は目黒の先。慶應義塾より程遠からずして然も靜寂の境なり。學科に倦める時こゝに半日を費すこと屢なりしが、此の秋また、學友泉山、山下兩君と俱に午後の學科を休みてこゝに遊ぶ

夕まけて土にこぼるる銀杏の葉こぼれ溜りて
音はあらなく

掃きよせて落葉焚くまも銀杏の樹やまずしこ
ぼす黄なるその葉を

掃きよせし落葉の中にこもる火の外には燃え
ず煙のみ立つ

銀杏葉の黄葉の夕日を眩しみと眼を移したる
木立のくらさ

むさし野の土をゆたけみかくばかり太き老樹
と銀杏はなりつ

むさし野の奥澤村に年久しくいます佛の膝の
塵はも

沈む日の光ををしみ秋なれや物食ひあそぶ佛
の前に

悔もなく怠けてを居れ武藏野のこのみ佛はと
がめざりけり

禁斷の境をやすみ武藏野の鳥のやからは塒と
なしつ

秋空の澄みふかくしてうかうかと怠けしこと
の樂しくありけり

武藏野は夕闇はやみ落葉の火もえさかりゆく
その火色はや

むさし野は全く夜となりれきろくと尙しも響
く百姓の車

挽歌

學友須田實の死をいたむ

まがなしき報知もて來し人の顏おどろきあまり見詰めたりけり

○この白き柩の中にまなこ閉ぢ臥せるものは友の實か

○盛りあげし飯に二本の箸をたて供へし見れば人のかなしさ

○なきがらの實が顏の安けさに笑はむとしてわれ泣きにけり

なきがらの實を見ればあなやすら佛となれば
かくも安けさ

○

遠からず病は癒えむ打ちよりて酒飲まむよと
言ひにけらずや

芝浦に漕ぎ出し舟やわれも乘り實が漕ぎし忘
らえなくに

學校の廊下を歩みうしろより實來ずやとふと
し思ふも

晴れわたり諸諸のものけざやかに眼にうつれ
ども實はあらぬ

病室の前に一本の無花果あり。去年、病中ながらこゝに移りし時は葉はおほかた無かりき

落葉せし家にうつり來いちじゆくの青の芽立を見て死ににけり

無花果の青の芽立は秋の樹の落葉するにもましてさびしき

○

なきがらの實を今し馬車にのせて燒場にやると時はせまり來

ものみなは陰をかぐろく持つ日なり柩の馬車の動きいづるも

柩をばのせて曳くなりあなあはれ馬は動かす
その雙の耳

○

桐が谷に月夜を黒く立つけむり實を焼きて立
ちかものぼる

西遊雜詠

新舞鶴。山本文顯君の許に客となりて

春のゆき海の向うの山に積りいとど靑める入
うみ海の色

春のゆき山につもれりこの朝頭にそそぐ井戸の水汲みて

雲來り雲去るなべに入海の向うの山の照りかげりしつ

山本、木船兩君に誘はれて近き山にのぼる

松の下にひかげのかづら清しきを敷きてし酌めば酒の樂しさ

山に來てはいたくな醉ひそ然れどもこの樂しさと云ひて酌みつも

山に來て食へば樂しもこの壽司をつくりくれしは文顯が妻

大江山途上

木の間より薄けむり立ちその向うに湛へさび
しく海の見ゆるも

連絡船にて。舞鶴港外

荒磯べに坑口ありて朝はやく出はひる人の見
えにけるかな

松ふかき島の端山に咲くさくら霧晴れゆけば
まつの間にみゆ

福知山踊

どつこいせどつこいせとて手打ちはやししめ
やかなれや福知山踊

家さかりはるばるも來て見るものか丹波の國
の福知山踊

若丸がをどる手振のをかしさも終にさびしき
福知山踊

御大典址

夜をこめて大みまつりに添へらくも庭燎たき
けむその址どころ

天地の音なき際に澄みいりつ庭燎もえけむそ
のあとどころ

とりよろふ松の木肌にうつりつつ庭燎もえけ
むそのあとどころ

すめろぎの御代をつがすと大みことと神宣らし
けむそのあとどころ

ちはやぶる神神あもり遠明るくいましし宮の
そのあとどころ

下鴨に小島仁君を訪ふ

春のあめ窓の外なる竹林に夜ぶかく降りて音
のせりけり

窓のそと硝子障子のすぐ外の竹に降る雨ひか
りつつ降る

奈良

春日野にここだ生れし蟆子のむれ拂ひあへな
くむらがり來るも

薔薇色の空のあかりに常盤樹の新芽立つこそ
やさしかりけれ

山の上のあかるきに居て眺むれば野はくらか
らし燈のともる見ゆ

嫩草山

○春日野の月夜に立てばあをによし奈良を去り
ゆく汽車の音すも

○寢よと吹く營所の喇叭かなしくも奈良の月夜
を鳴りわたりつつ

法隆寺村

ふさぶさと芽立つ藺草の田の遠に一つ塔見ゆ
斑鳩の塔

晝ふかし法隆寺村に一臺の車きたりて音をたてにけり

道のはてに車かくろひいや遠きその道のはて
の一むら木立

法隆寺

金堂のをぐらき出でてうつし世の雀の聲をき
きにけるかな

夢殿の階のすきまの巣をいでて蜂はつるめり
かがやきながら

蒲公蒲のたけて飛ぶ日となりにけり夢殿のべ
の蜜蜂のころ

宇治川の早瀬のぼると太綱の手握りかたく舟
曳くらしも　宇治

枇杷の花

いつの日に實となるものか枇杷の花咲きは咲
きつつ哀れなりけり

枇杷のはな眼にこそ立たね日を經ればはつか
に見えて實を結びけり

うつし世の木の實の形さだかにぞ見えそめし
もよ枇杷の葉の上に

ほし物が乾かぬといふ人のこゑ枇杷の向うに
こもりてきこゆ

人はみな寢しづまりたる夜を深く藥飲むこそ
さびしかりけれ

試驗前

大正四年

六十首

雜詠

河口慧海師西藏將來品展覽會にて

窓の外の秋の常盤樹ゆれてあれど人はさびし
も曼陀羅見をり

西藏のはだか菩薩の繪をみれば男のなやみあへて隱さず

獸のつめたき革につつまれて一切經文室にみちたり

街上

澄みとほり空はもいまだ暮れきらず電車を待ちてひもじかりけり

のびるだけは伸びきはまりてぷらたなす秋風吹くに音たてにけり

巢鴨

水のべの木の葉はいまだ散らなくに水はいよいよ澄みまさりたり

通學

福澤の塾の生徒の一人とぞありつゝわれの何にさびしき

靴のさきに石を蹴かへす何となき嬉しさにしも馴れてさびしき

制服の金のぼたんをしみじみといとしさあまりまさぐりにけり

慶應義塾圖書館。　北村四海氏作手古奈

階の下に裸身の手古奈うれひ居りここにはと
ぼし夕の光

深夜

いつ果つる思なるらむさもあらばあれ今は寝
なむよ小夜ふけにけり

更けまさり夜寒ながらに燈は明し悲しきこと
は考へざらむ

讀書深更に及ぶ。俄に鼻血いでて机上にした
たる

うつし身は血を漲らすしんしんと家の外には
草木のねむり

庭前

いささかの土の割目に流れいりて消ゆらく水の光りたるかな

柿の樹は小かりけれ實をもたず秋はやく葉をおとしたりけり

今熊山

武藏の今熊山のいただきに水の音ききて下りて來にけり

今熊の山頂の水うれしみつ神主の妻に物言ひにけり

少年のむぎわら帽子ひかるなり向うにつづく
青の山なみ

多摩川

大木の多摩川やなぎ枝垂れずその葉ひそかに
ゆれて光るも

猿

秋の日の植物園にわがはひり猿見て居ればさ
びしくなりぬ

白白とかわける檻の土さびし猿はひたすら物
食ひゐるも

皮むきて物食ふ猿の手はかなし人間の手に似たるなりけり

人間の言葉を知らぬ猿なれば人間の顔は見ざりけるかも

いつぱいに秋の日させる檻のなか猿ひそまりて蚤をとりをり

父

父とわれ争ふことも親しげに語らふこともあらざりしかな

吏となるなゆめとぞ父は戒めきはかなき吏にて父はありしなり

七日目に一日の休おほかたはいねて休みきか
なしもよ父

汽車にのりてはるばる來り父の骨を拾ひし人
も今はあらずけり

横須賀、舞鶴に在任中の父は手づから諸種の釣
道具を作りて海に出づるを娯しみとしき。釣
道具今なほ手提籠の中に殘れり

いくばくの章魚釣りけむか古びたる章魚釣道
具みればかなしも

丹後の海かそけくも鳴りここだくの水母うか
びて今かもあらむ

蝶

眞夏空ひかり溢れてみちの上に蝶一つ飛ぶまつしろの蝶

おどろきて見つむればこれ白き蝶ひらひらとして飛びてゐるなり

夏の日の光の中に飛びてゐし蝶ふと見えず柳の青さ

東京のこのまんなかに蝶の來て遊ぶ思へばさびしかりけり

眼とづれど日の明るさは限なし日のあかるさは瞼しみとほす

泰山木

手にとりて見がたきものにわが思ひし泰山木の花いまぞ手にしつ

手にとれば花はいよいよ大きかり花はいよいよ眞白かりけり

すがすがし泰山木のはなびらよ盃として酒のむべかり

日に照りてしづもり立てる泰山木日に照りて葉は濡るるが如し

かぜ吹けばゆらゆらに揺るる泰山木こずゑに大き花一つつけ

大弓

朝はやくしづもる中にわが矢はも射あてにければ高く音せり

引きしぼりねらひすまして放たむとするこの
たまゆらの心尊しも

生ものの生の命もとりぬべき力こもりて鏃ひかるも

若林正行先生

老の身のわが師ありがた弓とれば曲れる腰もたつと云はずやも

雜　詠

春芽はも今はかぐろみ柏の樹とこはならねど
ものさびにけり

夏くれば柏ふたたび新芽ふきいよよ物さびし
づもり立つも

小夜中の天のかぐろさ見つむればその一とこ
ろ明らみきたる

桐の葉に小夜中の雨降るきけばげに幽けくも
ふれるなりけり

いささかの怒の後のさびしかも怒ののちに物
食ひ居れば

芍藥

戸を開けば瓦斯のあかりのほの青く流れてそこに芍藥の花

茎のうへに芍藥のはな今はなしひよろりと高き芍藥の茎

桐の花

桐の花わが思ふ子が往きかよふ徑のほとりに散りにけるかな

桐の花まばらに落ちて思ふ子がゆける足あとしのばしめたり

桐の花うすむらさきに暮れなづむ雨の夕はまぎれてぞ咲く

○

しるしなき戀をもすると嘆きつつ詠みて殘せるいにしへ人はや

竹の獨樂

眼を閉ぢて深きおもひにあるごとく寂寞として獨樂は澄めるかも

しんしんと立ち澄む獨樂に六月の青葉の風は光りたりけり

○玲瓏と澄のよろしも竹の獨樂ほがらかに音を
なりいでにけり

○しんしんと湧きあがる力なにものも彈き飛ば
さむ竹の獨樂あはれ

庭燎 終

この集は、順當に行けば昨大正九年秋頃までには出來る筈であつた。實際、原稿の整理も半ば以上進んで居り、松村君の手で出版の手筈も調つて居たのであるが、扨整理の歩をすすめようと思つて原稿に向つて見ると、滿足な歌の一首もないのに心挫けて、失望して、何時も筆を擱いてしまつた。いよいよ出版の決心をしたのは、今年にはひつてからのことである。それは、今年は多くの歌集が出版されるだらうと云ふ豫測が、私の心を浮き立たせたにも依るが、逢ふ機會の最も多い川田順氏、國民文學の社友、さう云ふ人達から、絶えず鞭韃を加へられたのに依ると云つてよい。その外にも、意外な未知の人々から、屢出版を促す手紙を寄せられたことが、どの位私

に勇氣をつけて呉れたかわからない。さうして、兎に角、貧しいながら『庭燎』一卷が出來上つたのである。私は先づこれ等の人々に感謝しなければならない。

私がはじめて窪田空穗先生の門にはひつたのは明治三十八年の秋であつた。爾來十五年、その間、同門の諸先輩と俱に『白露集』『黎明』の二つの集を編んだことはあるが、單獨で集を出すのはこれが始めである。歌を詠みはじめた中學時代のことを考へると、隨分遠い氣がする。それが今にして漸く、歌數三百八十五首ばかりの渺たる集になつたのかと思ふと、原稿を前に置いて撫然たらざるを得ない。歌數の少いのはまだしも、かう纒めて讀み返し

て見ると、今更ながら心境の未熟さが耻しい程である。私の歌はこれからだと云ふ氣がする。かうしては居られない氣がする。それにしても、これ迄の過程を考へると、生來病身で怠惰な私には、恐らく長命しないであらう私には、向後二千首の歌は詠めないかも知れない。さうして幾何の秀歌を殘し得るのだらう。こんなことまで考へて、私は更に撫然とするのである。

この集を編みながら、私はいろいろの人を思ひ出して居た。

私に最も近い周圍の人達のことを先づ考へる。その人達は『夜は退屈で困ります』と云ふ代りに『あなたは夜、

うちに歸つて何をして居ます？』と私に對つて尋ねた人達である。正直に云へば、私はその人達に對して、かなり誇を感じる。それは、その人達が纒つた何もしなかつた間に、兎も角も歌集が一册出來たと云ふ淺はかな誇である。然し矢張り寂しい氣がする、その人達に私の歌集が何の權威もあるまいと思ふから。

私は、酒井溪水君と宗耕一君とを思ひ出して居た。俱に同門の先輩で、歌をはじめた當時の私は、兩君の歌を愛誦したものである。さうして、兩君とも久しい以前に消息を絶つてしまつた。この兩君が何處かで私の歌集を讀んで呉れゝば好いがと思ふ。『まだ歌など詠んで居たか』と笑ふかも知れないが、無下に貶しめるやうなことはな

いであらう。何か良い點を見つけて佳い言葉をかけて呉れるであらう。知己の少い私には殊に兩君のことが思ひ出されるのである。

私は又、故人になつた須田實と小島仁とを思ひ出した。須田實とは慶應義塾に一緒に學び、彼の爲めに私はこの集唯一の挽歌を詠んだ。けれども若し生きて居たら、良い交は續いたであらうが、私は彼の爲めに歌は詠まなかつたらうし、彼は又、歌集などは顧みもしなかつたであらう。小島仁は古い歌仲間で、彼が京都醫科大學の助手をして居た頃に、私はその下鴨の下宿を訪れて二首の歌を詠んだ。生きて居たら、私の歌集が出來たことをどんなにか喜んで呉れるに違ひなかつた。そのくせ、私は彼

の爲めにたうとう一首の挽歌も詠めずにしまつたのである。

最後に多くの人々に心から感謝しなければならぬ。

出版のことで絶えず心配して戴いた窪田先生に先づ感謝の辭を申上げる。松村英一君から萬端の面倒を見て貰つたのを殊に難有く思ふ。わざわざ打ち合せの爲めに大阪まで來て貰つたりして濟まないことである。序だから後の思出の爲めに書くが、この集、編輯は北河内蹉跎村の寓居で成り、今この文を綴りつゝあるところは大阪市内である。恰度、轉居の際に松村君が來合せたので、手傳つて貰つて荷物を運び込んだ儘、二人で宇治に遊んだ。

四月十四日宇治川堤の櫻がちらちら散る日である。その晩は一杯の酒に淘然と醉つて花屋敷の靜かな一室に枕を並べて寢た。色々な事件が重つたもので、私は又その時職に離れなければならないやうになつて居たのである。

廣部さよの夫人から、意外な援助を得たことは非常な喜びであつた。この本が立派なものになつたのは全く夫人の賜である。松岡映丘、人見少華兩氏が御忙しい中を執筆して下さつたことは感謝に堪へない。人見氏には心やすだてから色々無理な註文をしたのを、快く容れられたことは難有い次第である。ポプリンの買入には富谷三郎君を煩した。さうして思ひ通りの品を手にすることが出來て難有いと思ふ。半田良平君からは口繪の世話をは

じめ、色々私の氣のつかない注意を與へられた、深く感謝する次第である。その他、川田順氏をはじめ、上杉一甫、春田有道、高橋榮治の諸君から絶えず注意や刺戟を與へられたこと、前田隆一君が快く出版を引受けて下さつたこと、尙厖應援の言葉を投げて下さつた未知の人々、さう云ふ人達に私は心から感謝の意を表して置きます。

大正十年四月二十九日、大阪市船越町の寓居に於て壽樹記す。

大正十年八月一日印刷
大正十年八月十日發行

【定價金二圓二十錢】

庭歌集
燎

著者　植松壽樹

發行者　前田隆一　東京市京橋區北槇町十一番地

印刷者　根本惣三郎　東京市芝區受宮下町二丁目四番地

發行所　東京市京橋區北槇町十一番地　振替東京三三一六番　紅玉堂書店

（就文社印刷）

◇ 紅玉堂書店出版書 ◇

歌集 〔國民文學叢書第一編〕 野づかさ 半田良平著 定價金一圓二十錢 送費金八錢

歌集 〔國民文學叢書第二編〕 庭燎 植松壽樹著 定價金二圓二十錢 送費金十二錢

歌集 〔國民文學叢書第三編〕 やまびす 松村英一著 〔近刊〕

歌集 鳥聲集 窪田空穗著 定價金一圓三十錢 送費金八錢

名所めぐり 最新旅行歌選 半田良平編 定價金一圓五十錢 送費金八錢

◇ 紅玉堂書店出版書 ◇

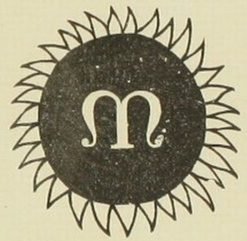
現代一萬歌集 松村英一編 定價金二圓三十錢 送費金十八錢

現代短歌用語辭典 松村英一編 定價金一圓二十錢 送費金六錢

新しい文章の作り方と味ひ方 前田晁著 定價金一圓四十錢 送費金八錢

犯罪王對探偵王 武田玉秋著 定價金一圓五十錢 送費金十錢

原稿用紙 〔十行二十字詰〕 百枚綴金卅錢 送費金四錢 送費五冊金十六錢



大日